

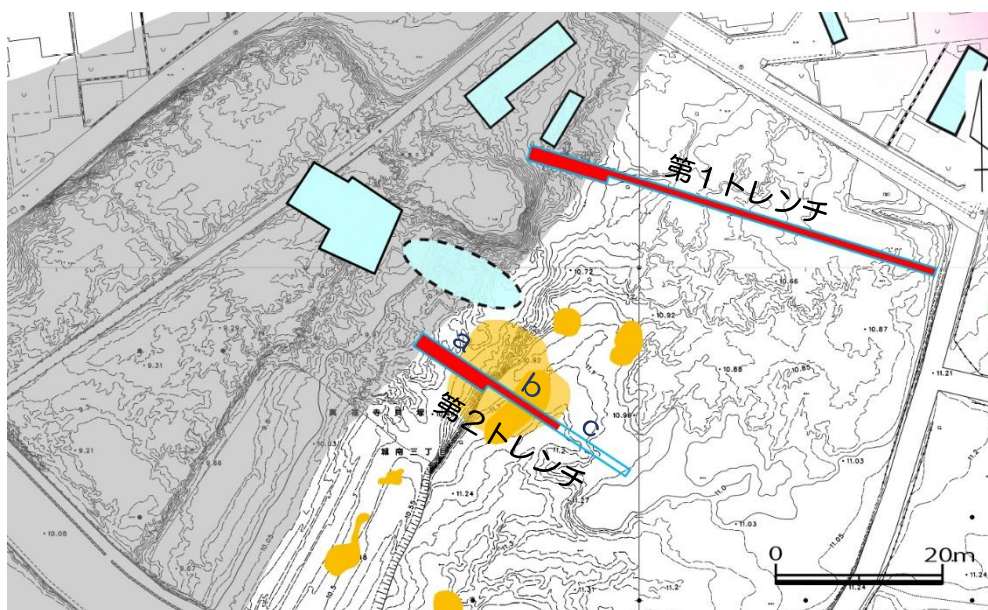
令和2年（2020）

■ 10月29日（木）

日ごとに木々が色づき、日陰を吹き抜ける風の冷たさに、季節の移ろいを五感で感じるようになりました。

9月に引き続き北側・南側の2本のトレンチでの調査を続けています。掘削範囲が深くなると、湧水が始まります。地下水位が上がっているせいでしょうか、昨年度途中で調査した北側のトレンチ（第1トレンチ）の東半分（窪地内）や第1・第2トレンチの西端（谷際）は、ついに常時湛水するようになりました。まず、水がたまったところを避けて調査を進めました。

なお、調査の内容を分かりやすくお伝えするために、第2トレンチをa・b・cの三つに区分して説明することにします。



水没した調査区（第2トレンチ）



令和2年（2020）

### ①第1トレンチの「高まり」

東側の窪地と西側の谷の間で調査を進めました。

北西から南東方向に延びる幅 50 cmほどの焼土帯を検出しました（写真1）。



≫写真1 焼土帯（黄色い線の間のおレンジ色のところが焼けた土）

この焼土帯の西側（上の写真の右側）は東側に比べて遺物が多く出土しています。時期は縄文時代後期後葉安行2式を主体としており、復元可能な個体も見られます。

現在、この焼土帯を当該期の住居縁辺部に伴うものと想定して調査を進めています。



≫写真2 伏せた状態で出土した浅鉢



令和2年（2020）

## ②第2トレンチの「高まり」と窪地

南側の第2トレンチのcの区画内の西側（谷部側）では、地表面の土を取り除くと、すぐにローム層を検出しました。ここでは、第1トレンチなどとはだいぶ様子が異なり、包含層の堆積が見られません。もともと縄文時代に利用がなかった場所なのか、それとも縄文時代以降の土地利用の中で、この部分の包含層は消滅したのか、今後検討していく予定です。

その東側では、晚期中葉を主体とする黒色土を検出しました。地山は、東側（写真手前）にむかって傾斜しており、窪地の端部を検出したものと思われます。

谷 >>

ローム層を検出 >>

窪地を埋める黒色土 >>



>>写真3 第2トレンチ 東から西側を望む